

巻頭言

国際教養学部長 杉江 修治

24号を迎えた本誌の第1号の発刊は1991年でした。中京大学の評価が次第に高まり、教・学両面で落ち着いた環境ができてきたという内的条件と、大学設置基準改正の動きが大きくなってきたという外的条件のある中で、教養教育を真剣に議論し、研究し、実践に移し、その成果を確かな足跡として残していこうという意志が、本誌であったと思います。私自身は故堀田英毅部長のもとで部長代理を務め、一方で将来計画委員会での教養教育の目的論などに積極的に参加していたことを思い出します。

教養部から出発したこの国際教養学部ですが、動きの激しいと感じられる国際環境に対して、同時に教養という不易にしっかりと根ざす風土をもつ学部です。学部教育は完成年度から2年を過ぎ、確かな教育の実績を積み上げつつあります。同時にカリキュラムを中心とした改革の動きも必要になってきています。この改革に際しては、やはり教養に軸足を置いてきた本学部の基盤を忘れてはならないだろうと感じています。伝統を意義あるかたちで取り入れていく努力は大事だと考えます。

24年前は、設置基準の改正などの動きはあったものの、政策的な縛りはまだ少なく、外圧の大きい昨今とは情勢は確かに違っていました。しかし、いつも外からの要請にこたえる作業ばかりでは本当の教育・研究の発展はありません。最近、全国的に、大学の改革に際して「教育」の側面ばかり強調されている動向があることには懸念を感じます。また、その教育への関心が「教えること」ばかりに傾いているように思います。教えることが教育だという素人的な教育観に立っている印象です。学びの支援こそが教員の仕事だという視点に立った改革、そして支援に必要な教員の側の幅を広げる研究環境づくりはおろそかにされてはいけません。研究面を後回しにするのではなく、教育・研究の二面は同時に充実を図るべき課題です。そういった改革がなされてこそ、単なる「面倒見の良い学部」という、素人の教育評価の枠組みから「主体的な学びと成長を促す学部」というように、あるべき方向を示すことのできる学部としての評価を得ることができるようになると思います。

私が主にかかわっている教職課程では、このところ「実践的指導力」の育成が強調されています。しかしその実態は、単に「即戦力」を求めているに過ぎず、教育を本質から改善していく力とはほど遠いものを求めているように思います。これでは課題の多い教育の現状の再生産が繰り返されるだけです。大学が、一人ひとりの学生の自己実現に手を貸し、社会的に意味のある人材育成をするためにも、近年の改革の流れを再度見直すことが大事ではないかと思います。

有能な人材の集まった国際教養学部のパワーが、さらに発展していくためにも、この『教養教育研究』の充実を図ることは重要だと考えます。